

高知方言のアスペクト—存在動詞を中心に—

本山 綾乃

(欧米第二課程 イタリア語専攻)

キーワード：高知方言，アスペクト，存在動詞，～ユウ／チュウ，～ヨル

0. はじめに

本稿の目的は、高知方言のアスペクト表現形式「ユウ形」「チュウ形」の使用実態を明らかにすることである。なかでも、高知方言に特徴的な存在動詞におけるアスペクト表現形式の対立を中心にその実態を明らかにしていく。

本稿における高知方言とは、高知県高知市で現在使われている方言を指すこととする。

また、本稿でいうアスペクトとは「出来事（運動）をひとまとまりのこととして点的にとらえるか、時間の流れに沿って線的にとらえるかといった文法的カテゴリーのこと」と定義する。

なお筆者は高知方言母語話者であり、以下例文番号は筆者による。

1. 先行研究

本稿では、西日本における存在動詞「ある」のヨル系形式・トル系形式の分布について考察した井上 (2001) の記述と、高知方言のアスペクト表現形式であるユウ形とチュウ形の対立と中和についての畠山 (2007) の記述をまとめる。

1.1. 井上 (2001)

井上 (2001) は、工藤・木部 (編) (2000) の諸方言アスペクト調査の結果と『方言文法全国地図』を用いて、「運動会有一些」という項目で現れたヨル系・トル系の分布を示している。

井上 (2001) の存在動詞「ある」とアスペクト形式との共起に関する記述は、次のようにまとめることができる。

- ・ <動作開始直前>は、存在型アスペクト形式では表しにくい。
- ・ <痕跡><経験記録>は、トル系で表す。
- ・ <動作継続><変化過程><反復習慣>は、ヨル系とトル系の併用がみられるが、ヨル系で表すのが一般的である。

1.2. 畠山 (2007)

高知方言では「ル形: ユウ形: チュウ形」によって順に、<完成相 (限界達成)>、<不完成相 (限界達成前)>、<パーフェクト相 (限界達成後)>が表現されるという。

例えば、共通語で「太郎が窓を開けている」と表す状況を高知方言では次のように言う。

(1a) 太郎が窓を開けユウ。<不完成相>(太郎が今まさに窓を開けているところである。)

(1b) 太郎が窓を開けチュウ。<パーフェクト相>(太郎が窓を開け、窓は今も開いている。)

[筆者作例]

畠山 (2007) によると、ユウ形とチュウ形にはそれぞれ次のような多義性が認められる。

ユウ形: 動作の継続、変化の進行、直前の外的兆候、多回的動作、反復・習慣

チュウ形: 変化結果の残存、動作の完了、事物の状態や特性

1.2.1. 「おる」のアスペクト対立

「おる」のル形・ユウ形・チュウ形について、畠山 (2007: 68-69) の記述をもとに表 1 にまとめる。

表 1: 「おる」のアスペクト対立

表現形式	アスペクト的意味	例文
おる	完成	(2a) あの子は、自分の部屋にしばらくおるぜえ。
おりユウ	不完成	(2b) あの子は、自分の部屋にしばらくおりユウぜえ。
おっチュウ	パーフェクト	(2c) どうもあの子、あの日、自分の部屋にしばらくおっチュウぜえ。

[畠山 (2007: 68-69) をもとに筆者が作成]

ル形とユウ形の違いは、発見の文脈で使えるか否かということである。ル形は、発見の文脈で使えるが、「存在の存続」を表す「おりユウ」という表現は、発見の文脈では使えない。ただし「まだ」という語を付けると正文となり、「発話時以前から継続して存在することに驚いた」という意味なら適格となる。

(3) いや¹、弘史が{おる/?おりユウ}!

(4) いや、弘史がまだおりユウ。

[畠山 (2007: 69)]

(2c) は、「あの子が部屋にいたという痕跡が発話時に残っている」ことを表現し、「痕跡の存在」というパーフェクトを意味している。存在動詞のチュウ形はパーフェクトしか意味しない。

[畠山 (2007: 68-69) を要約]

1.2.2. 「ある」のアスペクト対立

「ある」のル形・ユウ形・チュウ形の対立について、畠山 (2007: 69) の記述をもとに表

¹ 例文 (3)、(4) の「いや」は、高知方言では発見や驚きを表すのに用いる。

2にまとめる。

表2:「ある」のアスペクト対立

表現形式	アスペクト的意味	例文
ある	完成	(5a) なんぼかつらいことがあるろうねえ。
ありユウ	不完成	(5b) なんぼかつらいことがありユウろうねえ。
あっチュウ	パーフェクト	(5c) なんぼかつらいことがあっチュウろうねえ。

[畠山 (2007: 69) をもとに筆者が作成]

出来事名詞をとる「ある」は動的な事態を指すためユウ形とチュウ形の対立があるが、モノの存在を表す「ある」はチュウ形を持たない。

[畠山 (2007:69) を要約]

2. 予備調査

予備調査として、畠山 (2007) への問題提起をもとに存在動詞のアスペクト表現形式について、また井上 (2001) の考察を確かめるべく高知方言における「運動会がある」のヨル系・トル系の使用実態について、二度アンケート調査を行った。調査の結果、1.1. でまとめた井上 (2001) の考察をほぼ確認し、さらに以下のことが明らかになった。

- ・ 高知方言において、存在動詞とアスペクト表現形式は共起しうる
- ・ 「存在が継続している期間 (時間)」がル形・ユウ形の選択に影響を与える可能性がある
- ・ モノの存在を表す「ある」は、ユウ形・チュウ形を持たない
- ・ 動的な事態を表す「ある」は、チュウ形と共起する
- ・ ユウ形・チュウ形以外に、若い世代でヨル形の使用がみられる

3. 本調査

先行研究と2つの予備調査をふまえ、次のような仮説を立てた。

- (A) <動作開始の直前>は直前のどの段階を指すかがアスペクトの選択に影響を与える
- (B) 「存在が継続している期間 (時間)」がル形・ユウ形の選択に影響を与える
- (C) <非実現>をユウ形で表すことができる
- (D) 高知方言のヨル形は若い世代で使われる新方言である

これらの仮説と、先行研究の主張を検証するために本調査を行った。

3.1. 調査方法

先行研究や2つの予備調査をふまえてアンケート調査を行った。

アンケートの回答には許容度を尋ねる方法をとった。提示した表現について、ごく自然

に使う表現である場合は◎、普通使わないが使っても不自然ではない表現である場合は○、普通使わず使うと若干不自然な感じがする場合は△、普通使わず使うと明らかに不自然である場合は×を記入してもらった。

コンサルタントは高知市近郊に在住の 15~81 歳の男女 54 名 (男性 31 名/女性 23 名、以下カッコ内は順に男女の人数を表す) である。このうち、18 歳まで別の土地で過ごした人や回答方法が間違っていた 10 名の回答を無効とし、有効な回答票は 44 (24/20) あった。有効な回答者の年代ごとの内訳は、10 代 6 名 (0/6)、20 代 7 名 (4/3)、30 代 12 名 (10/2)、40 代 8 名 (4/4)、50 代 7 名 (4/3)、60 代 1 名 (0/1)、70 代 2 名 (1/1)、80 代 1 名 (1/0) である。アンケートを作成する上で着目した点などを表にまとめる。

表 3: 本調査の設問テーマとポイント

テーマ	設問	状況	ポイント	
開始直前	1-1.	二日前	開始直前がいつを指すかによって、アスペクトの使い分けがあるかどうか。「ある」にアスペクト形を用いるか。	
	1-2.	前夜		
	1-3.	当日朝		
「おる」のアスペクト	2-1.	蜂	動物と人間でアスペクトの使い分けに差があるかどうか。	
	2-2.	太郎		
	3-1.	短期・室戸	期間が短いか 長いかで	距離の遠近で 差があるか。
	3-2.	短期・韓国		
	4-1.	長期 (永住)・東京	用いる形式に 差があるかどうか。	永住か期間限定か で差があるか。
	4-2.	長期 (限定)・沖縄		
将然と 非実現	5-1. ²	飛行機滑走路 <将然>	実際に飛んでいない、助走の状態でもユウ形を使うかどうか。	
	6-1.	靴を履く<将然>		
	6-2.	靴を履く<非実現>	実際に動作が行われるか否かでアスペクトの使用に差があるかどうか。	
	7-1.	転ぶ<非実現>		
	7-2.	転ぶ<実現>		
ヨル形	8.	意志・未来の	ユウ形と区別してヨル形を使うかどうか。世代差に注目。	
	9.	継続		

3.2. 調査結果

結果を考察するにあたり、自由記述の回答としてアスペクトにかかわらない終助詞を記入してある回答は、終助詞を除いた部分のみを調査対象とする。

² 実際には用いたアンケートでも設問番号が 5-1. となっているが、5-2. があるわけではなく 5. の誤りであることをことわっておく。

3.2.1. <動作開始の直前>の段階によるアスペクトの使い分け

設問 1-1. 運動会が行われる二日前。「明後日運動会がある」

設問 1-2. 運動会が行われる前日の夜。「明日運動会がある」

設問 1-3. 運動会が行われる日の朝。「今日運動会がある」

動作開始の直前を、運動会の二日前・前夜・当日朝の三段階で調査したところ、「当日朝」でユウ形の許容度がわずかに高くなる。ただしル形が圧倒的に優勢であることから、<動作開始の直前>は存在型アスペクト形式では表しにくいということがわかる。その原因としては、コンサルタントが「ある」という状態動詞によって運動会が終了する時点を想起しづらく、ユウ形を使うことが不自然だと判断した可能性や、運動会当日朝になり運動会の開始から終了までがある程度具体的に想像できるようになったため当日朝のユウ形の許容度が高くなった可能性が考えられる。また、二日前・前夜から比べて当日朝でユウ形に◎と○をつけた4人のうち3人が60代以上であり、以前は<直前>をアスペクト形式を用いて表現していた可能性も考えられる。

3.2.2. 「おる」の継続アスペクトの使用実態

設問 3-1. 今、太郎が2泊3日の合宿に室戸に行っている。太郎の居場所を尋ねられ、次のように答える。「太郎は今室戸にいる」

設問 3-2. 今、花子は3日間韓国に研修旅行に行っている。花子の居場所を尋ねられ、次のように答える。「花子は今韓国にいる」

設問 4-1. 太郎は高校卒業後、東京で就職した。太郎の居場所を尋ねられ、次のように答える。「太郎は東京にいる」

設問 4-2. 花子は3年間限定の転勤で、沖縄に住んでいる。花子の居場所を尋ねられ、次のように答える。「花子は沖縄にいる」

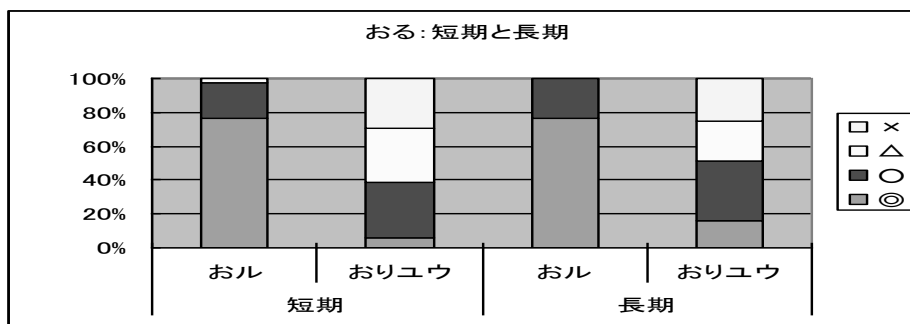


図 1: 設問 3-1.~4-2.

「存在の期間」を短期と長期で比べると、長期の方がユウ形の許容度が高い。ユウ形を短期で◎にしたのは5人だったが長期では14人であった。すなわち、先に指摘した「存在が継続している期間(時間)」がル形・ユウ形の選択に影響を与えるという仮説(B)は、複数の話者において実現しているということを確認められた。ただし、長期の存在が<習慣>を表しうるといことや、ユウ形に◎をつけたのが短期では有効回答全体の10%以下、長期でも20%に満たないことから、今後更なる調査が必要である。

距離の遠近や、滞在期限の有無によってル形・ユウ形の使い分けや許容度に差があるということは確認できなかった。動物と人間で比べると、ユウ形の許容度は人間の方が高いという結果が現れたが、「ヨル系ユウ形が<習慣>を意味する」というこれまでの先行研究の指摘する事実が影響しているものと考えられ、今回の調査だけでは判断できない。

3.2.3. <将然>と<非実現>を表すアスペクト形式の使用実態

設問 5-1. 飛行機が離陸しようと、滑走路を走っている。「飛行機が飛びつつある」

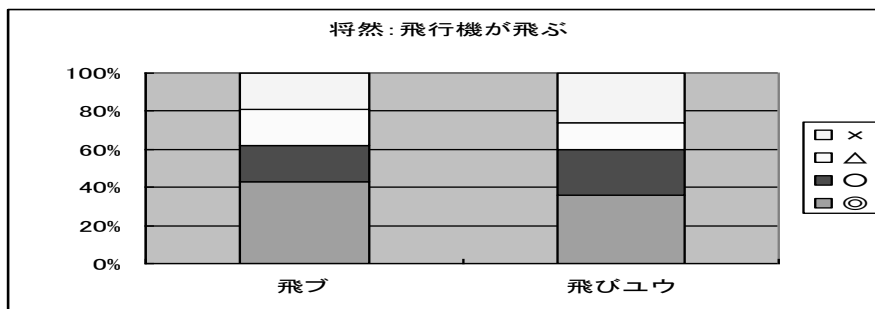


図 2: 設問 5-1.

ル形よりわずかに(3人)許容度は下がるものの<将然>を表すのにユウ形が用いられることがわかる。高知方言ではヨル系形式で<将然>を表せるといえる。ただし、<将然>はアスペクトの意味として非常に弱く他の条件に影響されやすいため、他の動詞でも調査を行うことが必要になるだろう。

設問 6-1. 太郎が、間違って次郎の靴に足を入れようとしていることを、次郎に言う。「太郎が、間違てあなたの靴を履こうとしているよ」

設問 6-2. 太郎が、間違って次郎の靴に足を入れようとしていたが、途中で気づいて履くのをやめたことを、次郎に言う。「太郎が、間違てあなたの靴を履こうとしていたよ」

設問 7-1. 道を歩いていて、石につまずき転びそうになったが、転ばなかった。「もう少しで転ぶところだった」

設問 7-2. 道を歩いていて、石につまずき転びそうになり、転んだ。「転んだ」

<非実現>を表すアスペクト形式の使用実態を調べた設問 6-1.の説明では、単なる「靴を履く」という<動作の進行過程>として捉えられている可能性が大いにある。そのため、この設問では<将然>という観点からユウ形の使用について十分に確認できたとはいえない。しかし、設問 6-2. など動作が実現していない場合にもユウ形が用いられることを確かめた。設問 6-1.~7-2.は条件設定を再考して調査を行なう必要がある。

3.2.4. ヨル形の使用実態と世代差

設問 8. 友人と買い物に行って、自分だけ二階を見に行くことにし、あとで合流するため電話してもらうとき。「二階を見ているからあとで電話して」

設問 9. 帰りが遅くなると父から連絡があった。先に食事をするということを伝えるとき。「先にご飯食べているからね」

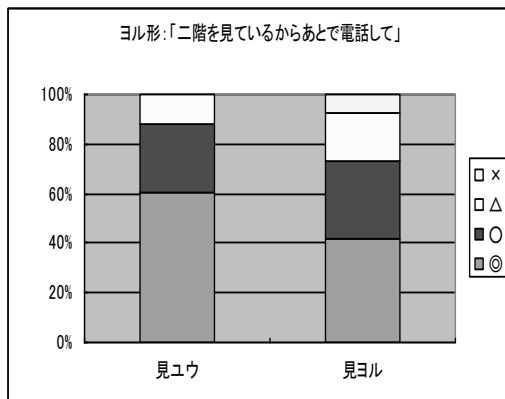


図 3: 設問 8.

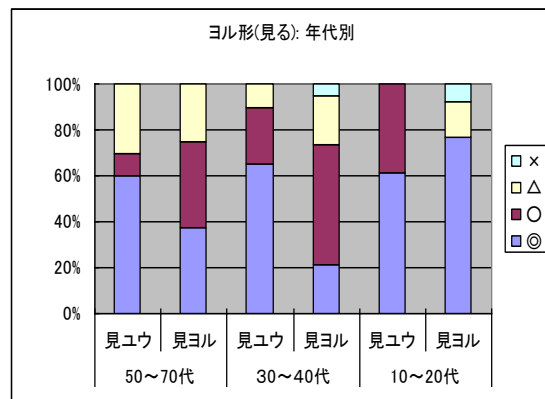


図 4: 設問 8. 年代別

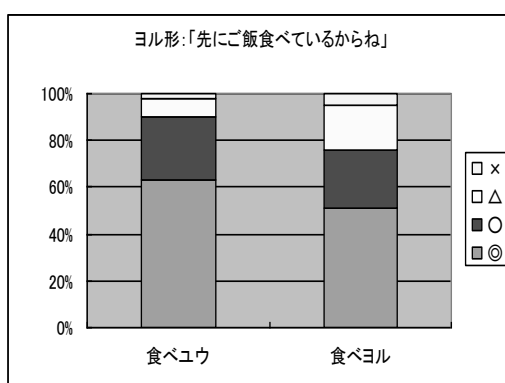


図 5: 設問 9.

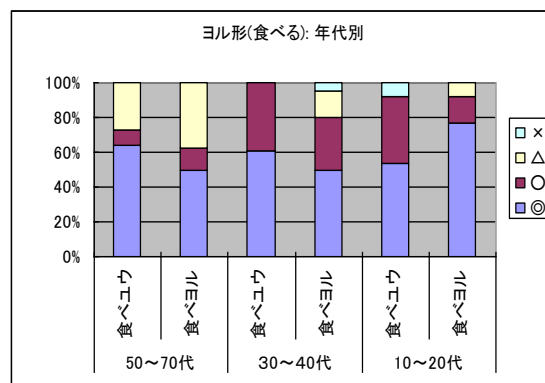


図 6: 設問 9. 年代別

設問 8.、9.ともにユウ形の許容度がヨル形よりも高いものの、ヨル形に◎・○をつけた回答も全体の70%を超えている。◎をつけた割合を年代別にみると、10~20代ではユウ形よりも高いが、30~40代と50代以上ではユウ形よりも低い。このように、若い世代に顕著に

見られるヨル形の使用は、他の世代の話者においても使用が確認できた。また、ヨル形のアスペクト的意味は内省から述べると「意志・未来における動作の継続」を表しているように思われるが、今後はヨル形とユウ形との意味の棲み分けがあるかなどについての調査も必要だ。

4. まとめと今後の課題

今回の調査で、以下のようなことが明らかになった。

- (A') <動作開始の直前>は直前が「物事の終了を想定しうる」直前ではユウ形が使われることもあるが、基本的に<動作開始の直前>は存在型のアスペクト形式では表しにくい。
- (B') 「存在が存続している時間」がル形・ユウ形の選択に関わるということは、複数の話者から確認できたが、さらに人数を増やして調査する必要がある。
- (C') <非実現>をユウ形で表すことは可能だが工藤 (2000) が述べたようにそのアスペクト的意味は弱い。
- (D') 高知方言のヨル形は決して新しい方言とは言えないが、若い世代ではユウ形よりも自然に使うと答えた話者が多く、関西圏の影響なども考えられる。ただしヨル形のアスペクト的意味についてはこれから調査しなければならない。

調査の問題点としては、調査方法がアンケートのみによることやコンサルタントの年代・男女のバランスがよくないことがあげられる。今後は、上で述べたような課題を解決するためにも幅広い世代から多くのデータを得る必要があるだろう。

参考文献

- 井上文子 (2001) 「運動会が「アリヨル」「アットル」について」工藤真由美 (編) 『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』, 51-59, 科学研究費補助金成果報告書
- 井上文子・沖裕子・木部暢子 (2002) 「テンス・アスペクト」大西拓一郎 (編) 『方言文法調査ガイドブック』, 65-83, 科学研究費補助金成果報告書
- 工藤真由美 (1986) 「アスペクトについてのおぼえがき」『国文学解釈と鑑賞』51-1: 39-48, 至文堂
- _____ (2000) 「アスペクト表現の地域差—西日本諸方言を中心に—」『国文学解釈と鑑賞』65-1: 34-44, 至文堂
- 工藤真由美・木部暢子 (編) (2000) 『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』科学研究費補助金成果報告書
- 島山真一 (2007) 「高知方言のアスペクト形式と時間性に基づく動詞分類」『日本語科学』21: 65-88, 国立国語研究所
- 吉田則夫 (1982) 「高知県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 8 中国・四国地方の方言』, 425-450, 国書刊行会